

この前、福島地区の新任の教頭先生方に話をする機会をいただいた。いただいたテーマは、「新任教頭に期待すること」だった。オーダーをいただき、すぐに考えた。教頭時代の様々なことが蘇ってきた。忘れないように、スマホに打ち込んだ。その後も、思いつくたびにスマホを手にした。

数日経つと、けっこうな量になった。エピソードが多い。アトランダムに打ち込んだものを整理し、話のプロットを考えた。すると、タイトルが浮かび上がってきた。「人を育てる教頭先生」である。これが、一番言いたいことであり、伝えたいこととなった。

こういう機会のためというわけではないが、私のパソコンのフォルダには、「人材育成」というフォルダがある。そこには、今まで蓄積された資料がたくさんある。そこから、今回のテーマに合うものをピックアップした。

また、「管理職研修」「学校経営」という紙媒体のファイルもある。こちらも分厚いものになっている。使えるものはないかと一通り見た。意外と使えないのだが、非常に勉強になった。パソコンのデータも全部見た。勉強になった。

いつも思うのだが、講話や指導助言のオーダーが入る。そのための準備をする。結局、自分の研修になっている。それがいい。だから、断ることはしない。話の順番を考える。今回もそうだが、自己紹介は最後に位置付けている。最初に自分のことを紹介する人が多い。私はしない。なぜなら、聞いている人にとっては、さほどの重要性はないように思うからである。話を進めているうちに、意図しているわけではないのだが、断片的な自己紹介にはなる。

ほとんどの場合は、時間が無くなり、自己紹介をできずに終わる。実は、話がおもしろく、ためになっていけば、「この人は、いったいどういう人なのだろう」と思ってもらえるはずである。自己紹介を聞きたいぐらいで終わるのがよい。

話というのは、最初で決まる。今回は、「こんなことはしていませんか」ということで4つの例を出した。自分の経験をもとに話した。思い返すと、教頭時代のことなら、いくらでも出てくる。これから、教頭として学校を支えていく人たちに伝えたいことが、山ほどある。それらのほとんどは、自分がうまくできなかったことである。あるいは、自分なりに考えてやってみたことである。

今思うと、密度の濃い教頭時代だった。多くのことを学んだ。本も読んだ。たくさんの人に助けられた。とにかく必死だった。余裕などなかった。それでも、人を育てたいとずっと思っていた。それは、自分が育ててもらったからである。恩返しのようなものである。

よく「講話」というが、同じ1時間でも、話の組み立て、話し方によって、聞く人によっては、感じる時間の長さが変わってくる。あっという間の1時間、というのが理想である。そうなったかどうかはわからない。だが、話している方は、あっという間の楽しい1時間だった。うなずきながら、反応しながら話を聞いてくれた教頭先生方の奮闘に期待する。